

戦後の教育政策と高齢者の音楽文化

石井 由理

Post-war Educational Policy and the Elderly People's Musical Culture

ISHII Yuri

(Received August 5, 2010)

キーワード：音楽教育、教育政策、音楽文化

はじめに

文化のグローバル化が進む中でローカルな文化はどのような影響を受けるのか。その影響に対して国家はどのような役割を果たしうるのか、また果たそうと試みるのか。このような問題意識のもと、筆者はこれまで国家が自国文化への直接的な影響を与えることのできる手段である学校教育に着目し、文化の構成要素である音楽文化を事例として研究を進めてきた。まず、義務教育における教育政策と第二次世界大戦後の教科書掲載曲を分析することによって、国家が明治維新以来、西洋音楽の普遍性をもった音楽を近代日本の音楽文化に相応しいものとして普及させようとしてきたこと、戦後の学校教育においても西洋の芸術音楽、後には西洋芸術音楽のもつ普遍性を備えた日本人作曲家の作品が教科書掲載曲の主流を占めてきたことを明らかにした(石井, 2004; Ishii, Shiobara & Ishii, 2005; 石井, 2006)。さらにこのような音楽教育が日本の音楽文化に対してどのような影響を与えたのかを探るべく、山口県内の高校生、大学生、60歳以上の人々を対象として日本の音楽の認識に関する質問紙調査を実施してきた(石井, 2008; Ishii, 2010)。その結果、大学生と比較して、60歳以上の回答者に西洋芸術音楽を好む傾向が見られることが明らかとなった(Ishii, 2010)。しかし、60歳以上の回答者数が少ないこともあり、これがはたして戦後の音楽教育の影響のためか、一般的に年齢が上がると西洋芸術音楽を好むようになるのかは解明できなかった。

本稿では、既に得られている調査結果に、東京近郊在住の60歳以上の人々を対象とした調査の結果を加えて回答者数を2倍にしたうえで、戦後の学習指導要領の改訂に基づいて2010年現在64歳～71歳と72歳以上の二つのグループに分けて回答を比較分析した。この比較によって、西洋芸術音楽を日本の学校音楽教育の目指すところとした1951年の学習指導要領に基づく音楽教育を小学生・中学生の立場で受けてきた世代と、それ以前の音楽教育を受けた世代の間で、日本の音楽および西洋芸術音楽に対する認識がどのように異なるかを明らかにすることが目的である。

1. 質問紙調査および分析方法について

質問紙調査は2008年3月に山口県内3ヶ所、2009年に東京都内2ヶ所の、高齢者の集まるイベント会場、集会などで実施したほか、個人的な知り合い数名に対して行い、山口と東京でそれぞれ38名の回答を得た。本稿の分析に用いるのは64歳未満の回答を除いたそれぞれ36名ずつ、計72名の回答である。調査の内容は、戦後の学習指導要領の分析から抽出した「日本の音楽」「わが国の音楽」「郷土の音楽」の3つの用語⁽¹⁾および「好きな音楽・よく聴く音楽」から思い浮かべる曲（曲名がわからない場合は歌手名、ジャンル名あるいは楽器名）をそれぞれ10曲以内で列記するもので、歌手名、ジャンル名、音楽のタイプが特定できる楽器名は1曲として数えた。

得られた回答は64歳～71歳と72歳以上の二つのグループに分けて集計した。1951年の学習指導要領の影響が及ぶ年齢の範囲をどこで区切るかは難しいが、本稿では少なくとも中学校での3年間もしくは小学校での6年間の音楽教育をこの学習指導要領のもとで受けた世代を考えると、2010年現在64歳～71歳の回答者とそれ以前の教育を受けた回答者に分類した。64歳～71歳の人々は、1951年の学習指導要領が出された時には5歳～12歳、これに代わる1958年の学習指導要領が出された時には12歳～19歳だった年代である。実際に学習指導要領のもとで編集された教科書が教室で使われるのは学習指導要領の発表からは多少遅れるが、教育政策そのものが既に変わっていることの影響と1950年検定の中学校音楽教科書でも西洋芸術音楽主体の内容に変わりはないことなどを考慮して、64歳～71歳で区切ることにした。この結果、64歳～71歳の回答者数は山口14人、東京9人の計23人、72歳以上の回答者数は山口22人、東京27人の計49人となり、人数のバランスにやや課題が残った。

分析はこれまでの研究を踏襲し、回答を外国曲、近代化以前の音楽スタイルをもつ日本の曲と西洋音楽スタイルをもつ日本の曲に分けた。さらに西洋音楽スタイルをもつ日本の曲をその機能によって、唱歌・童謡等の西洋音楽理論に基づく日本人作曲家の作品、歌謡曲等の大衆音楽、校歌、軍歌、映画・TV・ラジオのテーマ曲・挿入曲、自治体・地元スポーツチーム・地元企業のテーマ曲に分けた。以下の表およびグラフ中では便宜上、近代化以前の音楽スタイルをもつ日本の曲を「伝統」、唱歌・童謡等の西洋音楽理論に基づく日本人作曲家の作品を「唱歌」⁽²⁾、歌謡曲等の大衆音楽を「歌謡曲」、映画・TV・ラジオのテーマ曲・挿入曲を「映画・TV」、自治体・地元スポーツチーム・地元企業のテーマ曲を「自治体」という項目で示している。回答者の記憶違い等で特定できなかった曲は「不明」とした。

2. 分析結果

2-1 「日本の音楽」

「日本の音楽」で思い浮かべる曲についての回答は表1のようになった。回答の集中した曲目を示したのが表2、それぞれのグループのべ回答数の割合を示したのが図1、図2である。のべ回答数に占める「伝統」の割合は両グループともあまり変わらない。また「君が代」⁽³⁾と「さくらさくら」を合わせた回答数が「伝統」カテゴリーの全回答数のほぼ3分の1を占める点、民謡の曲名のバリエーションが多い点も共通している。違いとし

表1 「日本の音楽」で思い浮かべる曲のカテゴリー別割合

	64～71歳の回答者		72歳以上の回答者	
	曲の題名の数	のべ回答数	曲の題名の数	のべ回答数
伝 統	14	32	32	58
唱 歌	36	85	54	137
歌 謡 曲	9	12	57	66
外 国 曲	2	2	7	10
校 歌	1	1	6	8
軍 歌	0	0	4	4
映画・TV	0	0	6	6
自 治 体	0	0	0	0
不 明	2	2	1	1
合 計	64	134	167	290

表2 回答が集中した曲

64歳～71歳
「伝統」カテゴリー：「さくらさくら」11人
「唱歌」カテゴリー：「荒城の月」13人、「ふるさと」11人、「花」8人
72歳以上
「伝統」カテゴリー：「さくらさくら」14人、「君が代」6人
「唱歌」カテゴリー：「荒城の月」25人、「赤とんぼ」11人、「ふるさと」11人

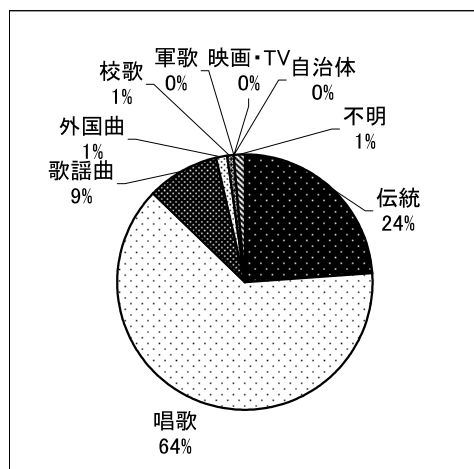


図1 64歳～71歳のべ回答数の割合

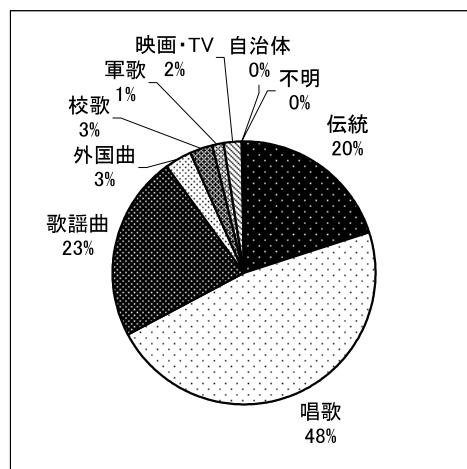


図2 72歳以上のべ回答数の割合

で顕著なのは「唱歌」カテゴリーと「歌謡曲」カテゴリーの占める割合である。64～71歳では64%が「唱歌」カテゴリーの回答となっているのに対し、72歳以上ではそれは48%であり、その代わりに「歌謡曲」カテゴリーが23%と64歳～71歳の回答の9%を大きく上回っている。大学生対象の調査では、「唱歌」カテゴリーの回答は42.6%であった（Ishii,

2010) ので、64歳～71歳は最もこの比率の高い世代となる。

64歳～71歳の「唱歌」の割合の多さは、曲目の豊富さと特定の曲への集中の度合いの2点から説明できる。曲目数は72歳以上では回答者49人に対して54曲であったが、64歳～71歳では23人の回答者に対して36曲と多くなっている。また、いずれの年代も「荒城の月」がほぼ同じ割合で圧倒的な支持を集めているが、「花」「ふるさと」に関しては72歳以上では「花」9人、「ふるさと」11人なのに対し、64歳～71歳ではそれぞれ8人、11人となり、回答者数の違いを考慮すれば2倍近い集中度となっている。

72歳以上の回答に「歌謡曲」が多い理由は不明である。演歌が多いことから現代のJ-popsなどと比べればより日本的だといえるかもしれないが、64歳～71歳の回答でも「歌謡曲」カテゴリーの曲は演歌系が多いので、曲自体の特徴のためとは考えにくい。72歳以上にとっての「日本の音楽」には学校で学ぶ音楽以外のものも多く含まれるが、64歳～71歳では「日本の音楽」＝学校音楽ととらえる傾向があるという説明が最も説得力がある。

「校歌」カテゴリーの回答では、回答者が答えた曲は自分自身の母校の校歌ではなく、日本を代表する旧制高等学校である一高や三高の校歌、寮歌である。同じ「校歌」カテゴリーとはいえ、この点が後の「郷土の音楽」に対する回答の中にあつた、おそらく回答者自身の母校の校歌、寮歌である「山口大学歌」「鳳陽寮歌」とは異なる点である。

2-2 「我が国の音楽」

「我が国の音楽」に対する回答は表3、回答が集中した曲は表4のようになった。図3、4に示したのべ回答数の割合からわかるように、両グループの間の違いは「伝統」と「唱歌」の割合が6%ずつ入れ替わるほか、72歳以上では軍歌が目立っている点である。また、曲の傾向を見ると、「伝統」カテゴリーの曲において72歳以上は民謡が33曲目中25曲なのに対し、64歳～71歳では15曲目中3曲のみと大変少なくなっており、64歳～71歳グループでは民謡が「我が国の音楽」の代表ではなくなっていることがわかる。

表3 「我が国の音楽」で思い浮かべる曲のカテゴリー別割合

	64～71歳の回答者		72歳以上の回答者	
	曲の題名の数	のべ回答数	曲の題名の数	のべ回答数
伝 統	15	27	33	76
唱 歌	19	23	27	48
歌 謡 曲	8	9	18	20
外 国 曲	4	5	5	5
校 歌	0	0	1	1
軍 歌	2	2	8	12
映 画・TV	0	0	2	2
自 治 体	0	0	0	0
不 明	1	1	0	0
合 計	49	67	94	164

表4 回答が集中した曲

64歳～71歳	
「伝統」	「君が代」 8人、「さくらさくら」 4人
「唱歌」	「花」 4人
72歳以上	
「伝統」	「君が代」 18人、「さくらさくら」 7人、 「ソーラン節」「五木の子守唄」 5人
「唱歌」	「荒城の月」 10人、「ふるさと」 6人、「花」 5人

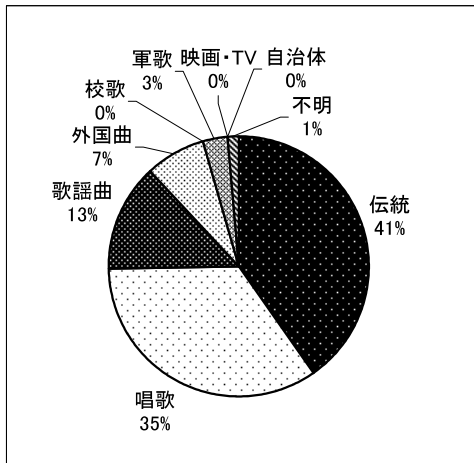


図3 64歳～71歳のべ回答数の割合

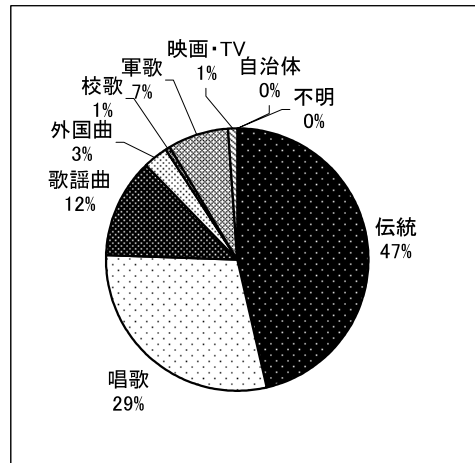


図4 72歳以上のべ回答数の割合

2-3 「郷土の音楽」

「郷土の音楽」に対する回答は表5、回答の集中した曲目は表6、それぞれのグループのべ回答数の割合は図5、図6のようになった。全体の割合としては、72歳以上の回答における「伝統」カテゴリーの回答数が64歳～71歳の同カテゴリーの回答数よりも9%多く、「自治体」カテゴリーが逆に64歳～71歳で13%多い。「伝統」カテゴリーの回答の内容を見ると、「ソーラン節」や「五木の子守歌」など、全国的に有名な民謡が回答者自身の出身地に関わらず回答される場合も多少あったが、圧倒的多数の回答が回答者自身の郷土の民謡であった。64歳～71歳があげた曲名24曲のうち古くから伝わる民謡が18曲、72歳以上では36曲である。また、分類上は「伝統」に含めたが、戦後新たに作られた民謡形式の郷土の歌が64歳～71歳では5曲、72歳以上では3曲ある。回答が集中した「油谷音頭」はこのようなタイプの曲であり、「自治体」カテゴリーとの境界線にある。また、他のカテゴリーの回答に関しても、自分の故郷に関する曲がほとんどであり、大学生への調査 (Ishii, 2010) で見られたような、「ふるさと」という曲への曲名ゆへの回答の集中や、自然や家族などの郷土につながるイメージを歌った曲を答えるなどの、自分の郷土とは直接関係のない曲を答える傾向は見られなかった。また、やはり大学生の回答に多く見られた自分の母校の校歌も、今回の調査ではわずかに前述の2曲にとどまった。

表5 「郷土の音楽」で思い浮かべる曲のカテゴリ別割合

	64～71歳の回答者		72歳以上の回答者	
	曲の題名の数	のべ回答数	曲の題名の数	のべ回答数
伝 統	24	41	47	96
唱 歌	4	5	8	11
歌 謡 曲	6	6	12	13
外 国 曲	0	0	1	1
校 歌	0	0	2	2
軍 歌	0	0	0	0
映画・TV	2	2	2	2
自 治 体	5	12	6	7
不 明	1	1	1	1
合 計	42	67	79	133

表6 回答が集中した曲

<p>64歳～71歳</p> <p>「伝統」カテゴリ：「油谷音頭」6人</p> <p>「自治体」カテゴリ：「油谷町歌」5人、「山口県民歌」5人</p> <p>72歳以上</p> <p>「伝統」カテゴリ：「川尻鯨唄」8人、「油谷音頭」7人、 「東京音頭」「五木の子守歌」「花笠音頭」各5人</p>

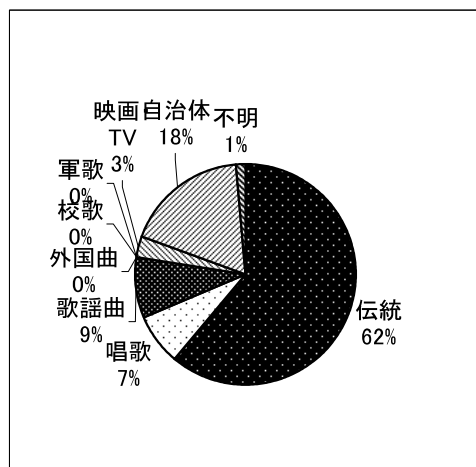


図5 64～71歳 のべ回答数の割合

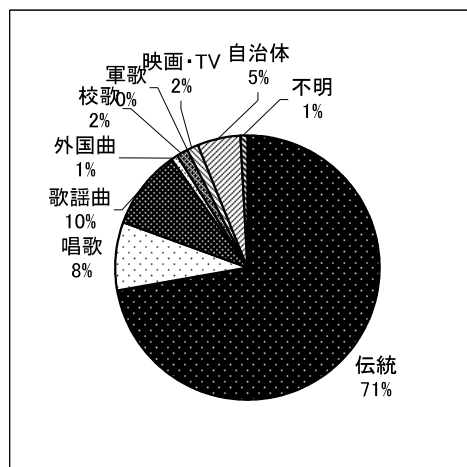


図6 72歳以上 のべ回答数の割合

2-4 「好きな音楽・よく聴く音楽」

「好きな音楽・よく聴く音楽」への回答、回答が集中した曲および歌手名はそれぞれ表7、表8のようになった。

表7 「好きな音楽・よく聴く音楽」で思い浮かべる曲のカテゴリ一別割合

	64～71歳の回答者		72歳以上の回答者	
	曲の題名の数	のべ回答数	曲の題名の数	のべ回答数
伝 統	7	41	47	96
唱 歌	11	5	8	11
歌 謡 曲	24	6	12	13
外 国 曲	42	0	1	1
校 歌	0	0	2	2
軍 歌	1	2	3	3
映画・TV	2	2	2	2
自 治 体	5	12	6	7
不 明	1	1	1	1
合 計	42	67	79	133

表8 回答が集中した曲

64歳～71歳
なし
72歳以上
「歌謡曲」カテゴリ：「千の風になって」7人、「美空ひばり」6人

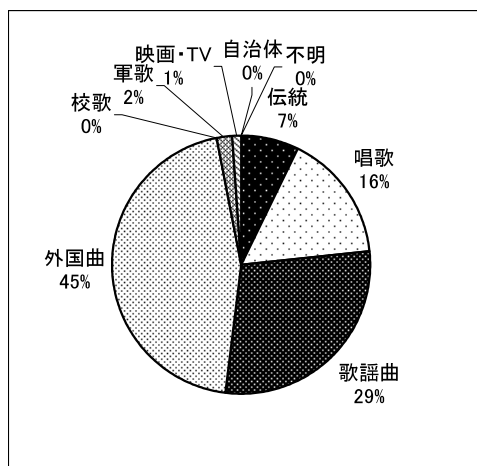


図7 64～71歳のべ回答数の割合

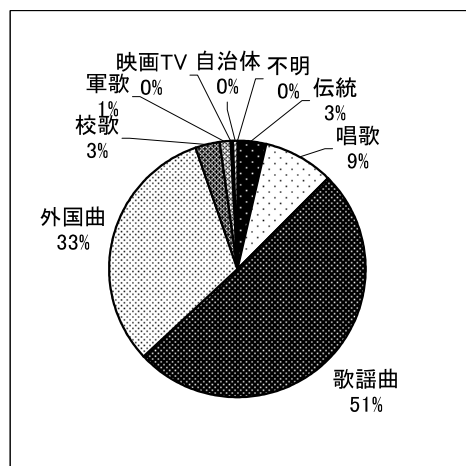


図8 72歳以上のべ回答数の割合

「好きな音楽・よく聴く音楽」に対する回答にどれくらい西洋芸術音楽が出てくるか、64歳～71歳と72歳以上で違いが見られるかが、今回の調査の主たる目的であった。まず、西洋芸術音楽に限らない外国曲全体（回答は欧米の曲がほとんど）が占める割合は、64歳～71歳で45%、72歳以上で33%であり、筆者が大学生を対象として行った調査（Ishii, 2010）での12%よりもはるかに多い。この年代の人々が外国曲を好む傾向にあることが改

めて確認できた。また、山口県内のみの調査の時には割合は26%であったことから、今回加えた東京近郊の回答者の方がより外国曲を好む傾向があることがわかった。しかし、この違いが単純に都市と地方の違いであるとはいえない。東京近郊の調査の際には他県出身者が多いことを予想して自分の故郷だと思ふ県を書いてもらったが、その結果、東京が故郷であるのは17名のみであった。また、東京以外、例えば九州や中国地方の県を故郷とした回答者の回答であっても外国曲は多かった。つまり回答者がどこ出身であるかよりも、故郷を出て東京で働き、そこに住むようになった人々のもつ特性であると考えの方が妥当である。学歴、職歴やより広い外の世界への好奇心など、「外国曲」志向と関係がある要素がいくつかありそうだが、解明のための情報が不十分であるため、本稿ではこれ以上追求しない。

次に「外国曲」中の西洋芸術音楽が占める割合であるが、これは64歳～71歳のグループでは、44の回答数のうち27で、「外国曲」に対するのべ回答数の60%を占める。すべてのカテゴリーを含んだのべ回答数98に対しては28%となる。つまり「好きな音楽・よく聴く音楽」に対する回答の4分の1以上が西洋芸術音楽となる。これと比較して、72歳以上の回答では、「外国曲」ののべ回答数73に対して西洋芸術音楽は45であり、割合は63%となる。しかしすべてのカテゴリーを含んだのべ回答数に対する割合は45/230で20%となり、「好きな音楽・よく聴く音楽」の回答数の5分の1となる。つまり「外国曲」を答えた回答に限定すれば、西洋芸術音楽を好む割合は64歳～71歳でも72歳でもあまり違いはなく、むしろ72歳以上のほうが3%多いのであるが、回答全体を対象にした場合は、64歳～71歳グループの方が西洋芸術音楽を好む傾向を示している。「外国曲」も西洋芸術音楽も、ともに72歳以上のグループよりも64歳～71歳グループの方が回答中の比率が高いのである。この結果は、少なくとも、大学生との比較において高齢者の回答に西洋芸術音楽が多いことが、「年齢が上がるにつれて西洋芸術音楽を好むようになる」からだとはいえないことを示している。また、64歳～71歳の年代の人々が学校で受けた音楽教育の影響の可能性があることも示している。

「外国曲」に含まれる西洋芸術音楽以外の音楽としては、64歳～71歳ではシャンソン、ハワイアン、タンゴ、ポップス、ジャズ、72歳以上ではシャンソン、スピリチュアル、ハワイアン、イーजीリスニング、映画テーマ、ミュージカル、ジャズ、ロシア民謡、アンデス民謡などがある。これらはこの世代の人たちが児童・生徒だった頃は学校では教えていなかった曲や歌手、ジャンルであり、この世代の「外国曲」好きは、学校教育以外からの影響も大きいことが推察できる。

「歌謡曲」カテゴリーの回答の割合も二つのグループの大きな違いである。64歳～71歳では割合は29%であったが、72歳以上では51%と過半数を占める。あげられている曲名はどちらのグループとも決して古いものばかりではなく、「千の風になって」、「涙そうそう」、「さよなら」（いきものがかり）、「手紙」（アンジェラ・アキ）などの曲や、平原綾香、氷川きよし、岩崎宏美などの歌手名もあがっており、若い頃に好きになった曲だけでなく、現在もこのカテゴリーの音楽を好んで聞いていることがわかる。64歳～71歳に関しては、このカテゴリーの割合が22%減った分、72歳以上よりも「外国曲」カテゴリーの曲が12%、「唱歌」カテゴリーの曲が7%多くなっている。大学生対象の調査結果（Ishii, 2010）も合わせて比較すると次のようになり、72歳以上の回答のほうが64歳～71歳グループの回答よりも大学生に近いとう興味深い結果となった。

「唱歌」 カテゴリー 大学生0.7%、64歳～71歳16%、72歳以上9%
「歌謡曲」 カテゴリー 大学生85.2%、64歳～71歳29%、72歳51%
「外国曲」 カテゴリー 大学生12.4%、64歳～71歳45%、72歳33%

おわりに

調査の規模が小さいこともあり、本稿で得られた結果をこの世代全体の傾向として安易に一般化することはできないが、少なくとも、「1951年の学習指導要領に基づく音楽教育を小学生・中学生の立場で受けてきた世代とそれ以前の音楽教育を受けた世代の間では、日本の音楽および西洋芸術音楽に対する認識が異なる」という仮説を支持する結果は得られた。今回の調査結果が示しているのは、64歳～71歳の回答者グループは、大学生と比較しても72歳以上の回答者グループと比較しても、最も「外国曲」を好み、最も西洋芸術音楽を好む世代であること、その一方で「郷土の音楽」としては自分自身の故郷の民謡を自分の音楽的アイデンティティーの一部として維持していること、「日本の音楽」としては「唱歌」 カテゴリーの回答が他の2グループよりも多い世代であること、である。前世代からの民謡文化を地域の音楽文化として継承しつつも、当時の学校教育政策の期待に応えるように西洋芸術音楽を自分の生活の中にとり入れ、それに達するステップとして学校教育が用いた「唱歌」 カテゴリーの音楽を「日本の音楽」の代表として捉えている回答者の姿は、戦後の教育政策が期待した音楽教育の成果と一致している。

註

- (1) 詳細はIshii, Y. & Shiobara, M. (2007) “A quest of Japanese-ness in the Japanese music curriculum” 山口大学人文学部 異文化交流研究施設『異文化研究 vol. 1』28-36頁、を参照。
- (2) ただし唱歌集に掲載されていた外国曲は外国曲として分類した。
- (3) 「君が代」の曲を「伝統」に入れるのか「唱歌」に入れるのかは、その成り立ちのタイミングと経緯を考えると微妙な選択であるが、本稿では音楽教科書にある「日本古歌」という分類を尊重して「伝統」に含めた。「君が代」をめぐる回答が大きく異なったのは「日本の音楽」の64歳～71歳の回答0と72歳以上の回答6の差のみであり、本稿の目的への影響は特にない。

参考文献

- 石井由理：公式の知識としての音楽，山口大学教育学部研究論叢，54（3），101-110，2004.
- 石井由理：小学校音楽教科書掲載曲の変遷にみる文化的アイデンティティー，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，22，173-183，2006.
- 石井由理：音楽的アイデンティティー創造の試みと結果，山口大学教育学部附属 教育実践総合センター研究紀要，25，143-154，2008.
- Ishii, Yuri: Musical tradition and culture in policy and reality: a case study

- in Yamaguchi prefecture, 東アジア研究, 8, 165-179, 2010.
- Ishii, Yuri, Shiobara, Mari & Ishii, Hiromi : Globalisation and national identity: a reflection on the Japanese music curriculum, Globalisation, Societies and Education, 3 (1), 67-82, 2005.
- Ishii, Yuri. & Shiobara, Mari : A quest of Japanese-ness in the Japanese music curriculum, 山口大学人文学部異文化交流研究施設異文化研究, 1, 28-36, 2007.